6 平成元年(1989年)6月10日 教皇様の聲 (昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
JUNE, 1989 毎月10日発行 第110号

教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1989
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

真理で神への道を拓く

「この人(ヨハネ)は証人として来た、光を証明するために来た。」(ヨハネ1・7)

ヨハネ福音書の序言は私たちの敬虔な注意を「はじめにあった」(同1・1参照)神のみことばの秘義へと向けさせます。「みことばは(神であった)(同1節)から」「世はみことばによって創られた。」(同10節) ここで私たちに関係があるのは、創造の秘義、創造なさった神の秘義です。みことばは永遠の光、御父と一体の御方です。それは全ての創造の最初に生まれた方、神の御子なのです。

光は神の知恵をもって創造に熱中しましたが、特別な方法で人間に自らを与えました。こうして、ヨハネの序言は私たちを創造する神から託身(受肉)の秘義へと導きます。なぜなら自らを人間に与えることにおいて、神と一つであるみことばは、御自ら肉(人)となったのです。みことばは人々の光となるため来られます。みことばは人間とその歴史の中心になることにより、この世に来る人間を啓蒙されます。みことばは、人間が受肉した神を通して神をより一層よく認識できるように、この仕事を人となって成就されるのです。人はそれぞれ、創造の始めから神の似姿に創られている他ならぬ自らの人間性を、さらに深く理解しなければなりません。

ヨハネ福音書の序言は神のみことばの受肉の秘義、人間の歴史と現世との頂点と転機を描いています。けれども、ヨハネは次のようにつけ加えています。「みことばは世にあり、世はみことばによって創られたが、世はそれを認めなかった。みことばはご自分の家に来られたが、その人々は受け入れなかった。」(同10〜11節) こうした言葉で福音史家は、神によってこの世に来られたメシア、救い主イエズス・キリストの生涯と運命を要約しました。ヨハネ自身はイエズス・キリストを自分の目で見、そのお話を自分の耳で聞きました。他ならぬ自分の手で肉となられた神のみことばに触れたのでした。

神は人として人間のもとに来られ、受肉したみことばを通して全てのものは造られたのです。それにも拘わらず被造物はみことばを受け入れませんでした。「光はやみに輝いたがやみはそれを悟らなかった。」(同5節)人間は光よりもやみを愛したのです。

イエズス・キリストにおける神の秘義の簡略な記述の中で、「神から遣わされた人がいて、その名をヨハネと言った」(同6節)と記されている一人の男が紹介されます。

ヨハネは「光を証明するために」(同6節)証人として遣わされました。彼が遣わされたのは、イエズスの生涯と御業の終わる時ではなく、その始まりにあたる時でした。神のみことばが永遠の秘義の敷居をまたごうとする時、キリストがベトレヘムで、あの夜処女の胎から生まれてこの世に来られようとする時、ヨハネは遣わされたのです。今や三十歳になったイエズスがイスラエルでメシアの使命を始めるべく、ナザレトを去ってヨルダン河に来られた時、その時ヨハネは遣わされたのです。

このヨハネとは、そもそも何者でしょうか? 共観福音書と同様、第四福音書の序言では、すでにヨルダン河に彼がいるのを知ります。「私のあとに来るお方は私よりすぐれた方で、私より前に存在しておられた」(第15節)と言う彼の声を聞くのです。

キリストとは同年齢ですが、ヨハネはキリストの道を準備する先駆者です。彼はメシアの到来を説く者として、旧約の預言者たちよりも特に目につきます。今もなおヨハネは預言者の中で「最も偉大」なのです。

第四福音書の序言はヨハネのことを預言者とは呼ばず「証人として来た」(同7節)と言っています。キリストが「あなたたちも私を証明するだろう、あなたたちは初めから私とともにいたからである」(同15・27)と言って証人たちと呼ばれた人々のその最初の証人がヨハネなのです。

ヨルダン河で洗礼を授けているヨハネは、これらの証人たちの最初の人です。彼は、神のみことばが受肉の秘義をもって始められる一つひとつの「新しい始まり」の証人です。その証言は偉大なイスラエルの到来、そして全人類のことなのです。彼はいわば旧約から新約への「証人の敷居」です。真理の霊、神の弁護者と一致している人々は皆、今後、十字架につけられ復活されたキリストの証人となるのです。ヨルダン河でのヨハネの証言の「敷居」をすでに越えたのです。 (八八・六・二三)

默想会のねうち

故ヨハネ・パウロ一世教皇は司祭にも信徒にも默想会に参加するようたびたびお勧めになりましたが、この価値ある体験をもつよう私たちにも勧めておられます。默想会の静けさは神の御声に対しておのれを開くための理想の時です。シナイ山におけるモーゼにとって、ホレブのエリアにとって、スビアコのベネディクトにとって、またアシジのフランシスコにとってもそうであったのです。

この霊的な修業を行うならば、確かに霊魂に平安を得る一助となります。事実、神の愛との一致はそれぞれが属する教会とのきずなを新たにするのに役立ちます。司教との一致・交わり、教会との交わりはいつもすこぶる有益ですが、愛の証言と協力がキリスト教共同体の成長に欠くことのできぬ要素となっている社会環境の中で、その一致は特に有益です。このようにして、調和のとれた生活の基盤と遺産である、家族に対する敬い、公正、勤勉のような精神的な諸価値もまた確実に強められるのです。

(八八・七・一六)

真理の岩の上に

1 あなたは岩である。(マテオ16・18)

イエズスはフィリッポのカイザリア地方でこのように仰せられました。この言葉はシモン・ペトロに向けられたものですが、イエズスの内なる眼、霊の眼差しは御父に向けられています。

「あなたたちは私を誰だと思うのか?」と尋ねられ、シモン・ペトロは「あなたはキリスト、生ける神の御子です」と答えました。(マテオ16・15〜16参照)

イエズスはこの答えがペトロ――ガリラヤ出身の漁夫、使徒――から直接に返ってきたのではなく、御父より出たものであることを御存じなので次のように仰せられました。

「その啓示は血肉からのものではなくて、天にまします私の父から出たものである。」(マテオ16・17)

シモン・ペトロの言葉は信仰告白です。ペトロの言葉は啓示によって生まれましたが、その源は御父です。

イエズス・キリストはその眼を御父に向けています。ペトロの答えのうちに、啓示から生まれた信仰が今や成熟の域に達しているのを認め、「あなたは岩である。私はこの岩の上に私の教会を立てよう。地獄の門もこれに勝てないであろう」(マテオ16・18)と仰せられたのです。

源は神の内に

2 教会は信仰の岩の上に立てられ、その源は神、つまり御父にあります。人間の言葉で――ペトロの言葉のように――この信仰は神からくる真理を表わしています。

真理に敵対するものは〈地獄の門〉です。人間の歴史の始めから、敵対者は常に真理を破壊しようと試みてきました。

ペトロの信仰告白は教会のために〈岩〉となったわけですが、その教会は〈地獄の門〉と敵対しています。敵対者は神を源とするものに勝とうと努めますが、成功しません。「彼らは勝てぬ」のです。(マルコ16・18)

キリストの言葉で、ペトロの名前は神からくるこの真理において教会が永続するという約束と繋がりを持つこととなりました。この永続するという確かな根拠は、キリストの十字架と復活にあることがわかります。聖霊、慰め主、真理の霊もキリストによって教会に与えられるのです。

ペトロを見つめる

3 ちょうどキリストが真理と愛の源である永遠の御父にじっと眼を向けておられたように、今、教会は眼を上げて使徒ペトロを見つめます。また、使徒の殉教の日に当たり教会は、使徒の人間としての生涯を黙想します。

教会はあの日――キリストが御父のもとへ帰られた後――ペトロが教会の頭であった時のことを思い浮かべます。

ペトロはヘロデの命令で牢に捕らえられていました。「過越の祭りが終わればペトロを人々の前に引き出すつもりだった」(使徒行録12・4)からです。ヘロデはその頃ヨハネの兄弟ヤコボを処刑しましたが、シモン・ペトロも同様にするつもりでした。

教会は聖霊の力の中で御子を通して御父の中に留まっているという真理、すなわち、教会が神に留まる根拠であるこの真理に対して、地獄の門は敵対しようとします。

そこで地獄の門はペトロを殺そうとします。彼こそ、キリストがこの真理の賜を与え、〈岩〉と呼んだからです。けれども彼は自分を守るために人間的な力は何も使いません。「二本の鎖でつながれて」(使徒行録12・6)エルサレムの牢の中で死刑の宣告を待っているのです。

喜びにあふれる感謝

4 神はペトロの生と死の主です。

「教会はペトロのために祈り続けていた。」(使徒行録12・5)教会にはペトロが必要でした。エルサレムの教会ばかりでなく、アンティオキアの教会も、ローマの教会も、ペトロを必要としていました。

本日の典礼は、神がヘロデの権力からペトロを奪い返してくださった喜びにあふれる感謝で満ちています。

奇跡的に牢から連れ出され、エルサレムの教会へと連れ戻された時、

上知の賜

聖霊降臨を目前にひかえ、聖霊の七つの賜について考えたいと思います。〈主の霊〉に関するイザヤ預言者の言葉をもとに(11・1〜2参照)、教会の聖伝が常に教えてきた賜のことです。

七つのうち第一にして最高の賜は上知です。これは天から受ける光、神秘的で最高の知識・神御自身の知恵に与らせてくれる賜なのです。聖書には次のように書いてあります。

「私は祈って聡明を与えられ、切に願って知恵の霊を受けた。私は知恵を、王座と笏よりも尊んだ。知恵に比べれば、富はとるに足りないと知り、どんな貴重な宝石も、それとは比べてみなかった。」(知恵7・7〜9)

上知の賜は愛に満たされた知識、新たな認識であり、そのおかげで人は神的なことがらに親しくなり、神的なことがらを味わうようになります。聖トマス・アクイナスは「一種の神の味わい」(神学大全、II-II, q.45, a.2 ad 1)と呼んでいます。

この賜によって、ほんとうの知恵者は、神について知るだけでなく、それらを経験し、生きるのです。

この知恵に満ちた認識によって、人間的なことがらを神の規準・神の光に照らして判断することができます。この賜で照らされると、キリスト信者は世界の現実を見通すことができるようになります。神の目を通して見たときほど、創造された世界の本当の値打ちを見極めることのできる人はいません。

この賜のおかげで信者一人ひとりの生活全体が、その出来事、希望、計画、業績とともに、聖霊の息吹に捉えられ満たされます。聖霊は、現在も多くの選ばれた人々に見られるように、〈天の光〉を注いでくださるのです。本日列聖されたクレリア・バルビエリも同じで、彼女はすでに若い頃から、このような賜に恵まれていました。

聖霊がマリアになさった〈偉大なこと〉は、このような人たちのうちで繰り返されているのです。私たちが心の中で神的なことがらを味わうことのできるよう、上知の座として敬われる聖母にお導きを願いましょう。

(八九・四・九)

説教・講話・書簡等の抄訳

神の福音は私たちの問いに答える

使徒自身が語っています。

また、詩篇にも表れています。幾世代も経て、こだまのようにペトロの言葉となって鳴り響いているのです。「主は……私を心痛から助け出された」(詩篇33・5)と。

教会はこの出来事を喜んで、「私は主を求め、主は私に答えられた」(同33・5)と叫んでいるようです。

これがペトロです。ヘロデの権力から救い出された夜、自分が全く神自身の力の中にいることを認識しました。そしてこの力に心から信頼してよりすがりました。

5 私たちはローマの殉教者ペトロの死を記念し敬意を表します。キリスト教の最初の受難の時代でした。ペトロは殉教においてタルソのパウロと一つに結ばれたのです。

私たちはダマスコへの道中でキリストがパウロに現れ、彼を使徒の仲間に導き入れられたことを知っています。それ以前の彼はサウロという名のファリサイ派の人で、キリストの弟子や使徒を迫害していました。けれどもパウロもまた使徒の一人となったのです。

パウロは使徒というよりもむしろ「選ばれた一つの器」になりました。キリストご自身がパウロについてこう仰せになりました。

「私の名を異邦人や王やイスラエルの子らにもたらすのは彼である。私の名のために、どれほど苦しまねばならぬかを私は彼に教えよう」(使徒行録9・15~16)

パウロはペトロと会いました。まずパレスチナ、アンティオキア、最後にローマで。迫害の時代、ネロの時でした。彼らは、ここで同時に見つけられたのです。

パウロもまた宣教の道すがら、自分が神の御手の中にあることを非常に強く体験しました。彼は幾度も「獅子の口から逃れた」(ティモテオ②4・17参照)のでした。

パウロは聖なる真理の賜によって、ペトロと一つに結ばれました。イエズス・キリストにおいて御父からくる同じ真理に仕えるためでした。

パウロはティモテオに書いています、「私はよい戦いを戦い、走るべき道のりを走りつくし、信仰を守った」と。(ティモテオ②4・7)

そして続けます、「それなのに、主はそばにあって私を強めてくださった。それは私によって宣教が全うされ、すべての異邦人にそれを聞かせるためであった」(同4・17)と。

彼はその生涯を終える時、「主は私をすべての悪い業から救いだし、天のみ国に救い上げたもうであろう」(同4・18)と記しています。

王国の鍵

6 今日この日、二人の使徒、シモン・ペトロとタルソのパウロは、福音という賜――御父から来る真理――によって一つに結ばれ、十字架に付けられた後、蘇られた主に共に会いに行きます。彼らが殉教した時、確かな証人となった時、彼らはローマで一つに結ばれたのです。

この死、この証から教会は成長していきます。「地獄の門もこれには勝てぬ」(マテオ16・18)教会はまずローマにおいて成長するのです。それから地上のあらゆる場所で、種々様々な民族の真只中で成長していくのです。

教会は使徒ペトロとパウロの遺産を身につけています。「その啓示は血肉のものではなくて、天にます父から出たものである」(マテオ16・17)〈地獄の門〉が、御父からくるこの真理に勝ったことがないのは彼らのおかげなのです。

天の国の鍵

「あなたが地上でつなぐものはみな天でもつながれ、地上で解くものはみな天でも解かれる」(マテオ16・19)

これは非常に緊密な繋がり、有機的な繋がりです。

〈地獄の門〉は迫害者の剣をもって攻め立て、シモン・ペトロとタルソのパウロを死に追いやることはできました。が、神が示された真理の力によって鉄のように鍛えられた教会における繋がり、すなわち、この天国との繋がりを破壊し去ることはできなかったのです。

永遠に自由

7 「私と共に主をたたえよ。共にその名を崇めよう。私は主を求め、主は私に答えられた。私は心痛から助け出された」(詩篇33・4~5)

詩篇は、今日の典礼でこのように歌います。

この言葉をシモン・ペトロが繰り返します。そしてタルソのパウロも繰り返します。

全教会も歌います。教会はこの真理の岩の上に立てられた、真理は神からくる、教会は恐れることがない！

教会は恐れからも免れている。

真理は私たちを自由にしてくれる。

真理は私たちを永遠に自由にしてくれる。

これこそ、全ての恐れから完全に自由になったその日のシモン・ペトロとタルソのパウロの使徒としてのメッセージなのです。

今行われている教皇の肩衣を課する荘厳な儀式はこの霊的な雰囲気の中に位置づけられ、それが司教たちをペトロの後継者に結びつける特別な交わりであることを示すのみならず、何にも増してキリストに対する愛、人々に対するより大きな愛の遂行であることをも表明しています。このような愛こそあらゆる恐れを散らし、羊の群れのために全くその身を与えることができる愛なのです。

(六・二九)

「人々はみなあなたを捜しています。」(マルコ1・37)

マルコの福音書の一節から黙想を始めましょう。この言葉は聖書のいろいろな書、ヨブ、詩篇、コリント人への第一の手紙、マルコの福音書から選ばれたテキストを通じて私たちに語りかけています。教会はこの精選された朗読を用意して、この聖なる典礼に神のみことばの食卓を整えるのです。

この言葉で〈教会は私たちに何を言いたいのでしょうか。〉〈何を教えたいのでしょうか。〉私たちが読んだ一節は何千年も昔のもの、今は二十世紀の終りです。大変時が経っているので、文学的古文書の価値しか見出せないと考える人もあるかもしれません。けれども神の御言葉は過去りません。「イエズス・キリストは昨日も今日も代々に同じである。」(ヘブライ13・8)

福音書は病人に囲まれたキリストを示します。シモンとアンドレアの家で、シモンの義理の母の傍らです。キリストが彼女の病気を治します。彼女はすぐ家事にとりかかりました。

「人々は病人や悪魔つきをみな連れて来た」(マルコ1・32)ので、この人たちの苦しみを治されました。イエズスはシモンの義理の母を治したように、病人を数多く治されたのです。(マルコ1・34参照)そして、寂しい所に退いて祈っておられると

不変の教え

聖書解釈と福音宣教

教皇庁聖書委員会メンバーへ

皆さんの研究テーマは、聖書解釈の歴史的・批判的方法に関するものですから、全教会にとってきわめて重要な意味をもっています。教会の教え（福音宣教）は「聖書によって養われ、規定されなければならない」（『神の啓示に関する教義憲章』n.21）と公会議は教えています。最初に出てくる問題は使徒行録のエチオピア人のエピソードに見られます。フィリッポは「その読んでいることが、あなたにおわかりですか」と尋ねます。（8・30）エチオピア人は解釈してくれる人が必要でした。ところで解釈は方法なしにできません。

現在、多数の方法が聖書解釈学者に提案されていると、委員長が話されました。別に新しい現象ではありません。教父の時代から種々の学派がまさにこの解釈方法の違いで区別されていました。こうして聖書は補完的な面で明らかにされてきたのです。方法が多様なために混乱をきたしたという印象を受けることもありますが、それはとりも直さず、神の御言葉の尽きぬ豊かさを示していると言えます。

解釈法の中には、信仰を持たぬ人が聖書を故意に破壊的な批判の対象にする意向で使用したがために、信仰にとって重大な危険となったものも時としてありました。このような場合、精神の真の要求に呼応するものであれば知識を豊かにするため役に立つ方法と、解釈に影響を及ぼし解釈を無効にする合理主義や観念論あるいは唯物論といった疑わしい前提とを、はっきり区別しなければなりません。信仰の光を受けた解釈学者なら、そのような前提を採用することは勿論できませんが、そのような方法からも僅かながら益することができるでしょう。旧約時代から、神の民は「エジプト人の掠奪品で自らを富ませよ」と勧められたのです。

どの方法にも限界があります。この点を認めなければなりません。この態度こそ、科学的な精神の一部をなすもの、（科学万能主義）と区別されるところです。信仰を持った解釈学者で真の科学的精神をもっている人なら、研究の成果は相対的な価値しか持たぬことを認め、その謙虚な態度は研究に影響を与えるどころか、その信憑性の保証となるはずです。

教会では、直接的にか間接的にかを別にして、すべての方法が福音宣教に役立たねばなりません。最近、聖書解釈が専門家の技術になってしまい、神の民の生活から掛け離れてしまったという声がよく聞かれます。このような不満は論駁できることですし、大抵の場合、言われのない不満だと思われます。とは言え、この点には注目すべき原因があるのも確かです。解釈の仕事に忠実であろうとするなら、聖書本文について二次的な面のみを研究して事足れりとするわけにはいきません。中心をなす使信、すなわち宗教的な使信・改心への呼びかけと、一人ひとりの人間および社会全体を刷新して神との交わりに導き入れることのできる救いの福音を強調しなければならないのです。

復活の夜、イエズスは御自分を弟子たちにお示しになるにあたり、「聖書を理解するよう彼らの心（霊）を開かれた」のです。（ルカ24・45）皆さんの仕事が教会と世界に豊かな実りをもたらすことのできるよう、同じ恩寵をお願いします。

（八九・四・七）

「シモンとその仲間」が来て「人々はみなあなたを捜しています」（マルコ1・36～37参照）と言いました。

こうして福音書は誰もが知っている場面に導き入れてくれます。イエズスは教えられる。病人を治される。イエズスは人々の真只中に、全ての人の側に、一人ひとりの傍らにいらっしゃる。イエズスは「他の人々のために存在する人」です。一人ひとり皆のために、特に貧しい人、苦しんでいる人、彼を捜している人のために存在する人です。

今日の典礼は、人間の苦しみと出会うキリストを二つの面から見せてくれます。第一にシモンの家と町とガリラヤの他の町での、じかに接することのできる次元、もう一つは時間を超えた次元です。第一朗読で語るのは旧約聖書のヨブです。ヨブは人間の苦しみの（永久のシンボル）、人間の地上での運命のシンボルとみなすことのできる（人物）です。

ヨブの言葉は深く心に浸みます。「私に与えられたのは苦しみの月々、悩みの夜々、床につくとき私は言う（いつ夜が明けるだろう）　起きればいう（いつ夕べになるだろう）……この世にいることは人にとって兵役であり、……私の日々は筬よりも早く回り、希望もなく消え失せる。」（ヨブ7・3～4、1、6）

苦しみの理由

ヨブという昔の人、人間的に言えば苦しみを受けるはずもない義人であるのに、悲惨な苦しみを味わわされた人は、（全ての時代の人間にとって、大きな問いかけとなっています。）　人間は絶えず苦しみの理由について尋ね、地上のあらゆる存在に関連してその意味を捜しています。ヨブの問いは、直接神に向けられたものです。

（福音書はその答えを与えます。）キリストはいつも苦しむ人々の傍らにおいでになります。キリストは、最後には恥辱の印である十字架を、ただその上で死ぬために肩に担われます。（キリスト御自身が問いかけに対する答えなのです。）（キリストを通して神は応えられます。）　旧約聖書のヨブに向かって、そして幾世紀を通してヨブのような人々全てに対して。この答えは難解ですが、同時に強力であり、決定的です。

キリストは答えである。これを理解するには、（キリストの福音のその秘義の深奥まで洞察すること）が必要です。詩篇の言葉が、不思議なほどキリストの内に実現されています。「主は……心くだかれた者をいやし、その傷を包まれる…（主はへり下る者を慰められる）」（詩篇146(145)3・6）

イエズスは「私たちの労苦を背負い、私たちの苦しみを担われた。」（イザヤ53・4）　彼の内に愛にて在す神が御自らを余すところなくお示しになっているのです。（キリストは神の秘跡なのです。）

キリストの過越の秘義の力に特別な方法で触れた使徒・タルソのパウロは、「ああ私が福音をのべないなら、禍なことだ」（コリント①9・16）と叫んでいます。

なぜ（禍）なのか。なぜなら、福音こそ人間の絶えず繰返す問いに対する神の答え、独特で明確な応答だからです。この（禍）を心に抱いて、使徒は（福音を述べるとはどういう意味か）を次のように説明しています。

「できるだけ多くの人を得るためにみなの奴隷になった。…弱い者とともにいるとき、弱い者を得るために弱い者となった。つまり私は、どうしても、いくばくかの人を救おうとして、みなに対してすべてとなった。」（コリント①9・19、22）　これがパウロにとって、福音を述べることの意味だったのです。使徒は次のようにつけ加えています。「私はそれらをみな福音のためにする。彼らとともに私も福音の恵みにあずかるためである。」（コリント①9・23）

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部八十円　送料実費
■一年予約九〇〇円　送料六〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393